茨城大学工学部　都市システム工学科　令和８年度前期　教育点検報告書

令和 8 年 9 月 18 日

報告者　都市システム工学科　学科長　原田　隆郎

１．実施日時と場所

令和 8 年 9 月 18 日（金）9:00～10:45　（TEAMS オンライン）

14:30～16:00　（TEAMS オンライン）

２．出席者

常勤教員：小林薫，原田隆郎，桑原祐史，藤田昌史，熊澤貴之，平田輝満，車谷麻緒，肥田剛典，増永英治，一ノ瀬彩，稲用隆一，大村高広，須郷大地，遠藤克彦，久野靖広

（常勤教員のうちの欠席者：横木裕宗，伊藤大知，海野遥香）

非常勤教員：出席なし

技術職員，事務職員：出席なし

３．添付資料

資料 1-1　2026 年度（前期）都市システム工学科・教育改善委員会 議事録

資料 1-2　2026 年度（前期）都市システム工学科・専攻 FD 研修会議事録

資料 2　2026 年度（前期）学科・専攻教育改善委員会および FD 研修会 議事次第

資料 3　2026 年度（前期）都市システム工学科 授業点検改善表集

４．授業点検の実際

４．１　アンケート実施状況

点検評価に先立って実施した，授業アンケートの回収状況は以下のとおり．

常勤教員担当科目分：　27 科目／常勤教員担当科目総数　27 科目

非常勤教員担当科目分：　3 科目／非常勤教員担当科目総数 3 科目

４．２　点検した科目

情報リテラシー，大学入門ゼミ，線形代数Ⅰ，都市システム工学序論，都市システム工学製図，構造力学Ⅰ，水理学Ⅰ，地盤力学Ⅰ，プログラミング演習Ⅰ，都市データサイエンス入門，測量学，土木計画学Ⅰ，建築計画学，建築一般構造，建築設計基礎演習，建築設計製図Ⅰ，建築設計製図Ⅲ，建築法規，建築建設施工，建築史，建築環境工学演習，振動及び耐震工学，構造解析学，地盤工学，コンクリート工学，上下水道工学，海岸工学，社会基盤プロジェクト演習 A，建設材料学，都市システムフィールドワーク（前期に開講した専門科目の総数 30 科目中の 100 パーセント）

４．３　具体的な点検方法

前期に開講した 30 科目中 30 科目について，以下の方法で点検を実施した．各科目の具体的な点検結果は，資料 1-1 の議事録における「点検評価と結果」を参照のこと．

- 3〜4 科目程度のグループ（資料 2 参照）ごとに，各授業担当の教員が担当科目の授業点検改善表（資料 3）等の資料に基づいて，特に前年度の点検評価で出された各科目の課題・問題に対する対応実績について説明し，それに対しての参加教員全員からの質疑・コメントを受ける形で，点検を実施した．
- 随時,提出済みの電子データや,茨城大学 FD/SD 支援システムを参加者が各自で確認し，それに関しても必要に応じて議論した．
- ファイル提出された教員間ネットワークの活動状況についても，確認した．
- TA を利用している授業は，TA 利用の実際やその効果について授業資料にまとめている．
- 各科目間の成績評価の分布状況を『成績分布表』を用いて確認した．（R3 機関別認証評価対応）

５．点検評価の結果

５．１　昨年度の点検評価で出された改善策のフォローアップ

点検を行った全ての科目において，昨年度に改善すべき問題点は改善されていたことが確認された．

５．２　今回の授業方法で優れている点

「構造力学Ⅰ」では中間試験を導入し，試験範囲を分割することで学習しやすくなり，昨年度より成績が大きく向上した．「水理学Ⅰ」では板書を中心とした授業が学生から学習効果の面で好評であり，平均点も前年度より約 10 点上昇した．また「地盤力学Ⅰ」では課題への個別フィードバックを行うことで着実な学習を促し，平均点が約 20 点上昇した．「土木計画学Ⅰ」では毎回の復習レポートについて，次回授業の冒頭で集計結果や個別レポートを紹介・解説することで理解度向上につなげている．「大学入門ゼミ」の建設現場バスツアーなど，専門分野への関心を高める実践的な取組も評価できる．

５．３　今回の授業方法で改善すべき点

「情報リテラシー」では，継続的な課題や最終レポートに取り組まない学生がみられ，早い段階での働きかけが必要である．「プログラミング演習Ⅰ」では，PC の基本操作に不慣れな学生がおり，学生間のスキル差への対応が課題となっている．「都市データサイエンス入門（旧：数理統計）」では，再履修者に対する基礎事項の復習支援が求められる．また，「建築史」では 30%の学生が授業進度を「少し速い」と回答していたため改善が求められる．「振動及び耐震工学」では，演習問題の充実や授業進度への配慮が指摘された．「社会

基盤プロジェクト演習Ａ」では，長時間のグループワークによる集中力低下もみられることから，学生の取り組み状況を担当教員が確認する工夫する必要がある．

６．教育改善活動

会議中に抽出された問題点について，その改善方法を議論したところ，以下のような意見があった．

- 基礎的な知識や PC 操作等に習熟していない学生に対しては，授業初期に復習や基本操作を確認する機会を設け，学生間の習熟度の差を縮める必要がある．
- 課題やレポートへの取組が不十分な学生については，提出状況を早期に把握し個別に声掛けを行うなど，学習を継続させるための働きかけが必要である．
- 授業の進度については，学生の理解度や授業アンケートの結果を確認しながら，説明時間や演習時間の配分を適宜調整することが望ましい．
- 理解度を高めるため，演習問題や小テスト，課題等を適切に取り入れることが効果的であるという報告があった．
- グループワークや長時間の演習では学生の集中力や進捗状況に差が生じるため，作業を段階的に区切り，途中で進捗確認や教員からの助言を行うことが有効である．

また，以下のトピックについても意見交換を行った．

○卒業研究発表会の実施方法の改善

- 昨年度後期の FD での議論を踏まえ，卒業研究発表会を従来の 1 会場から 2 会場に分けて実施する案について検討した．2 会場化により現在 1 日半を要している発表会の時間を短縮し，学生・教員双方の負担を軽減できるとの意見があった．
- 一方，卒業研究では専門分野以外の基礎的知識や関心を養うことも重要であり，少人数の学科をさらに分けることへの慎重な意見も示された．
- 2 会場制を採用する場合には，DP，専門分野，融合研究テーマ等のいずれを基準として会場を分けるかに加え，グループ教員による評価方法や優秀発表賞の選出方法についても検討する必要があることを確認した．
- 今後，発表時間の効率化と分野横断的な教育効果の双方を考慮し，発表会の実施形式を継続して検討することとした．

○1～3 年生（主に 24T 学生）の学修状況について

- 1～3 年生の学修状況について，担任から学習態度や GPA 分布等の報告を行い，学生の修学状況を教員間で共有した．全体として大きな問題はないものの成績上位者と成績不振者の二極化がみられることが報告された．
- 特に社会基盤 DP では，数学系科目を苦手とし，「勉強の仕方が分からない」ことから成

績不振となっている学生がみられ，卒業研究への着手が難しくなる可能性のある学生も確認された．

・ 今後は，成績不振が深刻化する前に対象学生を把握するとともに，数学系科目を中心とした基礎学力や学習方法についての支援を検討する必要があるとの認識を共有した．

〇研究室に在籍する学生の研究組状況について

・ 就職活動等を理由として研究室に通わず，研究活動への取組が十分でない大学院生の事例について情報共有し対応を議論した．

・ 就職活動中であっても学業を優先することを基本とし，合理的な理由のない欠席等については安易に認めるべきではないとの認識を共有した．

・ 継続的に指導しても自律的な研究活動が認められない場合には，特別演習・特別研究の単位認定や修士論文審査等において，学修・研究の実態を踏まえて適切かつ厳正に評価する必要があることを確認した．

７．報告書の開示

この報告書と同じ内容の書類を TEAMS 内に設置した学科 FD チャネルに保管し，学科の全教員が自由に閲覧できるようにした．

８．『産学連携カリキュラム改良委員会』を受けての教育改善活動について

直近の産学連携カリキュラム改良委員会における議論を受けて，FD 研修会では学生のモチベーションをいかに向上させ，学習を促しいくかについて議論を行い，学年別の成績分布等を比較し，近年の学生の学習状況を共有し適切な授業方法等についての議論を行なっている（資料 1-2 参照）． 昨年度の産学連携カリキュラム改良委員会で得られた成果や意見が，今年度の授業内容に反映されているかを確認した．特に情報処理技術やデータサイエンスに関する教育内容について，カリキュラム改善の成果が今年度の授業に反映されていることを確認した．

９．その他

特になし．